

特別の教科道徳の研究について

上田 知沙都

特別の教科道徳が目指す「子供が学びをつくる姿」

詳しくは目指す子供の姿シートへ

これまでの2年間の研究を生かし、今年度特別の教科道徳では「子供が学びをつくる」姿を下記のように設定しました。また、この姿を実現するための支援を整理しました。

【課題設定】

子供の姿 自分の日常生活と学ぶ道徳的価値との関連を考えたり、他者との道徳的価値観の違いを意識したりする活動を通して、教師とともに自分たちの実態に合った課題設定をすることができる。

支援 自分の問題として捉えたり、日常の生活と教材の関連性を意識したりできるよう導入を工夫する。

【課題追究】

子供の姿 自力追究や他者との協働を通して、自己を見つめ、多面的・多角的に考えることで、道徳的価値の理解を深めることができる。それをもとに自己の生き方を見つめ直すことができる。

支援 価値理解、他者理解、人間理解が進むよう、適切な主発問をしたり、ツールを用意したりする。また、時間軸を意識した言葉がけや問い返しを行う。

【パフォーマンス】

子供の姿 問題や道徳的価値について自分の考えを自力追究したり、他者と協働したりしながら、道徳ノートに記述したり、ツールや掲示したものをもとに議論したりすることができる。

支援 考えを主張できるツールを活用したり、板書を構造化し、児童が概念化できるような支援をしたりする。

これまでの研究を通して、子供が自己をメタ認知する支援によって、子供たちが高いモチベーションを維持し、活動を調整したり目的に応じて選択したりして、主体的に学び続けることが明らかになりました。今年度は道徳科では、「価値理解」「人間理解」「他者理解」の点において「自己調整」していく姿に整理・焦点化して、研究を進めてきました。

特別の教科道徳研究実践における子供の「自己調整」

詳しくは実践指導案へ

特別の教科道徳の研究実践「古いバケツ（B友情、信頼）」では、子供の「自己調整」の姿を下記のように構想し、授業実践に取り組みました。

	価値理解	人間理解	他者理解
自己調整の実践における姿	異性間であっても互いのよさを認め、学び合い、支え合いながらよい関係を築くよさを認識する。	異性に対しても信頼をもとにして、理解し合い友情を育て、互いのよさを認め合っていくことの大切さに気付く。	男子と女子がお互い尊重し合うことについて考える。
	・ 男女で協力して掃除をすると、気持ちが良くなるんだ。 ・ 「男子だから」「女子だから」という考え方をしない方が、お互いに良い関係を作れるんだ。	・ 仲良くした方が良いと分かっているも男女で対立してしまうことがあるな。 ・ お互いに歩み寄る必要があるな。	・ 色々な解決の方法がありそうだ。 ・ より良い解決策を選んで、男女が尊重し合って生活していくことが大切なんだ。

特別の教科道徳「古いバケツ（B友情、信頼）」研究実践について

研究実践においては、上越教育大学学校教育総合研究センターの脇川知子氏の、「自己調整能力を高める指導の工夫—情報処理ステップ学習を導入した道徳授業の実践から—」の実践研究をもとに授業を考えました。

【対人交渉方略を生むための情報処理ステップ】	
①問題の定義	社会的問題の性質を適切に定義する能力
②方法の産出	問題を解決するにはどのような方略があるのかを考える能力
③方法の選択と実行	複数の方略の中でその場面に一番ふさわしい方略を選択し、実行する力
④結果の評価	そうした方略によって生じた結果を評価する力

表1 対人交渉方略を生むための情報処理ステップ

本研究では、情報処理ステップ（表1）に基づいて発問をすることにより、場面のとらえ方や解決しようとする心のはたらきが明らかになると考えられています。

本時では、それを使用する資料に当てはめて授業を展開しました。他者の考えを聞いたり、その行動を取った結果の心情を考えたりしながら、よりよい関係を築くために大切なことに気付けるようにしていきました。

※ 上越教育大学学校教育総合研究センター.2007.「教育実践研究第17集 2007『自己調整能力を高める指導の工夫—情報処理ステップ学習を導入した道徳授業の実践から—』」.脇川知子

子供の姿から



図2 事前アンケートをもとに想起

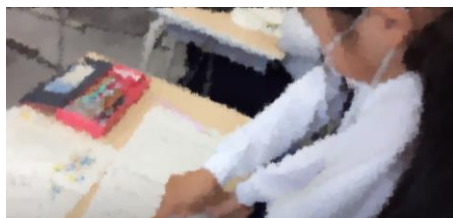


図3 他者と話し合う



図4 学びを日常生活につなげる

事前アンケートでは、「自分たちも掃除の時に男女でもめてしまったことがある。」「授業でグループ活動があると、男子はちゃんとやらない、女子は勝手に何でも決めてしまうなどと喧嘩をしてしまうことがある。」など、日常生活を振り返ることができました（図2）。

また、資料について考える場面では、「このまま無視して掃除を続けた方が速いんじゃない。」「でもそれだとずっと陰悪なままだよ。」など、他者と比較したり議論したりしながら、価値について考えを深める姿が見られました。初めは「無視して男女分かれて掃除をした方が良い。」と考える児童が多かったのですが、「今後男女の仲はどうなるだろう。」という発問をきっかけに「やはり協力した方が良い。」という考えにまとまっていきました（図3）。

最後の場面では、アンケートや資料をもとに考えたことを見ながら、今回学んだことを自分の言葉で整理していきました（図4）。

研究から見えたこと

この3年間、特別の教科道徳では「子供が学びをつくる」ために、常に日常生活に繋げられるような授業展開を大切にしてきました。児童にとって「分かっているけれど実際にはできていないこと」「自分も教科書と似た様な体験をしたけれど、うまく対応できなかったこと」などについて導入段階で想起するとともに、展開後半で「ではどのようにすればうまくいったか。」「これからできそうなことは何か。」など最後には自分の日常生活に立ち返って考えられるようにしました。それにより、授業時間で自己調整をするとともに、日常生活においてもトラブルが発生した際によく話し合いをするなど、生かされていたのではないかと考えます。

また、ツールを活用したり板書で対立構造などを整理したりしながら、価値について多面的・多角的に考えられるような工夫も大切にしてきました（図5）。それにより、「自分とは違う考え方をする人がいるんだ。」「どちらがより良いのだろう。」と、多様な考えを知ったり比較したりすることにより、価値についてより理解を深めることができていたのではないかと思います。

今後は、更に価値について教師が分析をして、より多様な考えを議論できるような授業展開を考えながら、学びの充実を一層大切にしていきたいです。

図5 様々な意見を板書に整理

